
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 永久の風 ~

ジャンヌ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～永久の風～

【Nコード】

N8290T

【作者名】

ジャンヌ

【あらすじ】

かつて、ミッドにとどろかせた空港の大火災。スバル・ナカジマともう一人いつしよに管理局のエース・オブ・エースの高町なのはに助け出された少年がいた。

名をグリム・アルヴェン

グリムは、憧れの高町なのはを目指して管理局に入隊する。

グリムは空戦でティアナとスバルは陸戦でそれぞれ道は違えどお互い連絡は取り合っていた。

すると、グリムのもとに起動六課へのスカウトが来る。

そこで、スバル達と再会しスバル、ティアナ、グリムの三人でコンビを組みあらゆる事に立ち向かうことに。
魔法少女リリカルなのはStrikerSのIFストーリーが始まる…

6月5日 お知らせ

*現在更新を停止して今までの総チェックおよび、改訂版を執筆中が終了しました。

改訂版は設定の大きな所は変えませんが一部変更(と言ってもかなり変わった可能性が)しましたのでご注意ください。

改訂版の製作中は「永久の風SS」を書いて繋げていく予定だったので、色々とアイディアが出ず、投稿できませんでした。
今後にご期待を。

第一話 ～プロローグは親父無双！～（前書き）

どうもお久しぶりです。ジャンヌでございます。

約1ヶ月もかかってしまいましたね・・・反省反省。

新作では、レチルが変わったり、レンヤ君が出なくなったり、親父出まくったりと色々変更させていただきました。

グリムの設定はあまり変えるつもりはありませんので、ご安心を。

それではどうぞ！

第一話 ～プロローグは親父無双！？～

第一話～プロローグは親父無双！？～

Side

まだ皆の記憶にも新しいであろう、新暦71年の4月29日のまだ冬の寒さが少し残る日の事であった。

この日、ミッドチルダ臨海第8空港で大規模な火災があった。その火災は、多くの人を巻き込んだが幸いにも死者は出ておらず。管理局員の迅速な対応のおかげであった。

「クソッ！ 火のまわりが早すぎる！」

「もう少しで応援の魔導師が来る。それまで持ち堪えるぞ！」

二人の局員が放水ポンプのようなもので火を消して行っているが、残念ながら火の回りのほうが速く現状が中々変わらずにいた。

その時、天井のむき出しになっている鉄骨がミキミキといやな音をたてた。

二人の局員はそれに気づいていない。

むしろ火を消すのに手一杯で周りが見えていなかった。そして、と

うとう天井の鉄骨が崩れだそうとしていた。

ギギギギッ　ギギッギー

金属が耳に障るような音を発した。

「ん？　何だこの音」

いやな音でやっと気がついたがとき既に遅し。鉄骨が落ちる寸前だった。

局員たちが上を向くと4mはあるであろう鉄骨がちよつと落ちてきていた。

「「うわああああああああつ！！！」」

もう逃げることも出来ない。

ほんの一瞬。

その時、一筋の光が光った。

ドガアアアアアアアアア

大音量を立てて鉄骨が下に落下した。しかし、その下には局員の2人はいない。

「おい！ 大丈夫だったか？」

助けられたのだ。

バリアジャケットが少し黒めの灰色のコートの様な上着。

裏には銀の十字架が描かれており、長く下に垂れてきている部分には白のラインが入っている。

そして白色の長めの動きやすさを重視した長いズボン。

銀の短髪で190cmはあるであろうその人は、今では有名になった「管理局のエース・オブ・エース」や「管理局の黄色い閃光」より前のエースでありストライカーである。

その名は、バルト＝アルヴェン

またの名を「白銀の救世主」

「は、はいっ！ 大丈夫です」

「そうか、なら消化活動を中断して外に出るぞ。ここももう危ない」

「「り、了解しました」」

急な有名人の登場に焦りを隠せない。いくらこの状況だからといって伝説のエースとご対面できたのはとても貴重なことだった。

「よしっ！ 今から天井に、でけえ穴空けるからちよいと離れとけ」

そっいつって右手に持つてる大きな剣を前に突き立てた。剣先の10cmぐらいが地面に刺さりそのままだった。剣の色が白なのか周りの炎の色をきれいに反射して赤色に染まっていた。

Side out

Side バルト

空の上は、地上の火のせいで星一つ見えない暗闇だったが、周りは明るく昼のようだった。

救助した隊員を救護隊に預けると後ろから誰かから声を掛けられた。

「よう。救助ご苦労さん」

「ああ、久々の再開を楽しみたいんだがよ。早いとこ俺の息子を探さないといけねえから、じゃあなゲンヤ」

「おい、まあまで。今から緊急でこの現場の指揮を執っているやつ
の所へ行くからよ、そこで安否を見たらいいじゃねえか」

一理ある。ゲンヤ、本名はゲンヤナカジマ。

陸士部隊である陸士108部隊の部隊長をしている人物で、現在二人の子（娘）持ちである。

奥さんは事件の途中で殉職。今もこのときの事件について追っ
てるらしい。

ゲンヤと俺は古くからの友人で、今も定期的に連絡を取り合っ
てる仲である。

「それもそうだな、まあ何せ俺の息子だ。簡単に死ぬはずがねえしな。それにあいつには“あれ”も入っていることだし……」

「そうか、“あれ”がか……。本人には言ったのか？」

指揮官の所へ行くまでの少しの間、歩きながら話し合っている。

「いいや、まだ言う事にはしていない。時が来たら……。時が着たら言うつもりだ。」

「そうか……」

なんとも暗い話したが、そうこうしている内に指揮官のところへついた。

そこで見たその指揮官は“知っている顔”だった。

Side out バルト

Side ハヤテ

「護衛部隊の指揮官さん到着です。あともう一人、バルトさんが来ています。」

「そうか、ありがとうなりイン・・・って、バルトさん!？」

当時バルトさんには、実戦訓練の指導にあたって貰った経験があり、思い出すだけで身の毛のよだつ訓練だったとだけここに記そう。下に降りる少しの間に、こんなことを考えていたのだ。

「すまん、遅くなった」

「よう! 久しぶりだな、八神よ」

「いえ、陸士部隊で研修中の本局特別捜査官八神はやて一等陸尉です。それと、お久しぶりですねバルト教官。」

「よせやい、今となってはお前の方が活躍してるし、階級だって上だ。バルトでいいよ」

軽く苦笑いして頭に手を当てて言った。

いつもながら軽い人だった。前もそうだったがいつもこのような感じなのだろうか？

(これで結婚してて、子持ち。ほんでもって“救世主”の異名か・・・)

「陸上警備隊108部隊のゲンヤ」ナカジマ三佐だ。それとバルトよ、知り合いか？」

ナカジマ三佐は私と敬礼を済ませるとバルト教官に問いただしてい

た。
バルトさんの事を聞かれると、妙なことに頭の中であの地獄のような特訓がフラッシュバックしてくる。
思わず、顔色が変わりそうなくらい気分が優れなくなったが気合で持ち直した。

「ああ、ちよつとな」

「ちよつとどころか、私の元教官です。それとナカジマ三佐に部隊指揮をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「かまわねえが、お前さんも魔導師かい？」

そう問われたので、私はネックレス型の自分のデバイスを取り出した。

十字の形で、少し厚めの剣を模したようだ。全体的に金色を貴重としており所々の黒色の線が美しいもので、アクセサリーショップで買ったら高値のように見える。

「はい、広域型なんです。空から消火の手伝いを・・・」

話の区切れのところ、もう一人のバルトさんの教え子から通信が入った。

(きつとなのはちゃんも驚くやるな・・・急に居るんやし・・・)

『はやてちゃん。指示のあった女の子と男の子無事救出。名前は、スバルⅡナカジマとグリムⅡアルヴェン。さつき救護隊の人たちに渡したんだけど、スバルⅡナカジマのお姉ちゃんが未だ中にいるんだって！』

あまり、大きな怪我もなさそうな親友の通信を見て少しほっとしたがしかし、まだ要救助者が居ることに顔をしかめる。

目の前に居るバルトさんが何やら何か思いついたような顔をしているが見なかつた事にしておこう。

『了解、私も直ぐに空に上がるよ』よー元気が高町。ゲンヤのこの娘と俺の息子を救助してくれてありがとうとさん。今から俺と八神が空へあがるから、まあ巻き込まれ無いように救助しな』って！人の通信取らんといってください！』

人の通信を取られてため息を吐いていると。予測どおり通信の向こう側から驚きの声が上がっていた。

『うええ、バルトさん来てたんですか！？』

『あたぼうよ！ たまたま休暇中に近くで大火災だったからな来て手伝ってたんだ。それじゃあなまた空で会おうか』

『えっ？ ちょ・・・』

急に通信を切り、こちらの方に顔をズイツと向けた。
やれやれと思いつながら頭を抱える。

以外に長い通信に思えたが、ざつと1分ほどの通信だった。

すると、急にバルトさんの体が光りだした。収まると髪の色が黒色に戻っており。顔の隣には小人が一人中にプカプカ浮いていた。

「そつだ、八神今から空へ上がるがリインを連れて行けよ」

リインが不思議そうな顔をして此方を見てきた。

私自身もあまり理解できなかった。

「なんでですか？ リインに指揮系統の説明やバックアップの補助をしておらおうと思てたのに・・・」

「まあ俺のレチルに任せな。だからよ先に空へ上がつとけ」

「えらい納得いきませんが・・・了解しました」

私は、まだ火の気が多く立ち上る空港の上空付近へとバリアジャケットを展開して飛び立った。

Side out ハヤテ

S i d e ゲンヤ

「はいはい！　レチルさんの登場だよ」

こんな状況でのこの機嫌の良さは一体何だろうか？
ゲンヤは一瞬取り乱しそうになったが何とか持ち直した。

「後のことはお前に任せるぞレチル。ゲンヤ、レチルにバックアップを任せるから指揮に専念してくれ」

すると、バルトは赤い空へと飛び立っていった。
バルトは二つのデバイスを持っていた。ユニゾンデバイスのレチル。ちようどさつき見たリインと同じ位の大きさで銀髪の腰まである長い髪が特徴。

バルト曰く、「普段は黒髪だがユニゾンして現場に行くことが多いから“白銀の救世主”なんて大層な名前もらっちゃったよ」・・・らしい。

そして、もうひとつのデバイスが白く厚くて幅が広い刀身が特徴の西洋剣型のストレージデバイスである。

ミッド式のくせに近接戦闘が得意なんて、やはり魔力ゼロの俺じゃわかんねえ事ばかりだ。

「それじゃあ、レチル指揮の情報関係を頼んでいいか？」

「はいはい、レチルにお任せあれ！」

少々気が抜けているように見えるが、その仕事は速くて正確だった。さすが、バルトの相棒ってことか……。

少し微笑んでモニターを展開して指揮系統の確認と指示の準備に入ろうとしていた。

「さてと、負けられねえな……」

自分でも知らないうちにつぶやいていた。

Side out ゲンヤ

Side

大火災の次の日の朝を迎えていた。

多くの臨時協力の魔導師のおかげで、火災は死者の一人も出さずに鎮火した。

中には、久しい人と会ったり、トラウマのよみがえった人物もいたりした。特に八神はやてがだが……

「昨日は、災難だったなあ〜グリム」

「あのっさ、俺魔導師になるから」

息子のグリムが急なことを言ってきたのでバルトは飲んでいたコーヒートを噴出しそうになった。

何とか持ちこたえて、モジモジしている自分の息子へ問いかけてみる。

「何だよいきなり、あれか憧れの人でも見つけたか？」

バルトは返事を聞くまでも無いぐらい確信のある質問だと思っていた。

なぜなら、昨日からグリムの目が強い意思のある目になっていたように見えたからだ。

「うん。すごかったよ。あの人みたいになれたらなあ〜って思ったんだ。」

十中八九高町なのは事であろう。昨日グリムを助けたのはなのはであり、それで憧れるのなら納得もいく結論だった。

「そうか、それならなるからには、全力を注げよ」

バルトも否定はしなかった。

グリムの頭をガシガシ撫でてニヒルに笑っている。

グリムの表情は頭を撫でられているからなのか、分からないが活き活きしていた。

四年後……

肩におそらくは、デバイスであろう大きな大刀を掲げている少年が一人ビルの上に立っていた。身長が178cmぐらい、黒髪だが少しの茶混ざりなのか太陽の光が当たるたびに色濃い茶色が時々見え隠れしていた。

バリアジャケットは武装局員の物に似ているが少々デザインが違っているのを展開している。

その少年の目の前にモニターが現れた。

「それじゃあ、空戦Bランクへの昇格試験始めますよ。今回の試験管は私レチル三等空尉が勤めていきます。受験者のグリム＝アルヴェンさん、ルールと準備の方はよろしいでしょうか？」

「ああ、いいよレチル三等空尉殿」

少し小ばかにしているように聞こえる。

なにせレチルはグリムの父、バルト＝アルヴェンのユニゾンデバイスなのだからというのは、説明しなくても分かることであろう。

「グリムく師匠に向かって意地悪うへんに敬語使っても本心じゃないのはわかってるんだからねっ！」

画面の向こうからこちらに向かってビシッと指を指してきた。相手が小さいのがわかってるせいなのか、いまいち迫力が無い気がする。

俺は、自嘲気味に苦笑すると更にレチルが続けてきた。

「あゝ！ また私のこと馬鹿にしてるゝ！ こつなつたらこつしてやるっ！」

レチルが指をパチンと鳴らすと、後ろから小さな爆発音が出た。いきなりのことだったので、「うわあ」と情けない声が出てしまい思いつきレチルに笑われてしまった。

「はめられたか」と少し笑いながら画面に向かって言っていた。

「ははははは！ あゝ笑った。それじゃあそろそろはじめますよゝ！ 空戦Bランク実技試験開始！」

開始の合図とともに俺は、魔力を集中させて中に浮いた。空戦の魔導師なのでこのくらいは朝飯前だ。

その後、直ぐにまっすぐ前を見据えて空へ飛び立った。

「さて、風の止まないうちにサクサクつとクリアしてやんよ!」

後ろから吹く少し強めの風が後押しするかのようにつにグリムの背中を押して駆け抜けていった。

グリムⅡアルヴェン 16歳 職業：魔導師

夢：救助のスペシャリスト

第一話 ～プロローグは親父無双!～ (後書き)

相変わらずの硬さと説明不足さ・・・

○的ビ○オー○フターに頼みたいぐらいだあああああ!

あ! 感想orご意見or訂正お待ちしておりますので。

中には親父サン(バルト)が返信する可能性が・・・

第二話〜試験は災難と何か〜（前書き）

さて、第二話ですね。

全力全開で書かせてもらいました。

そして倉西様前回の感想ありがとうございました。

よく読んだら誤字のオンパレードですね（笑）

それでは、第二話スタートですっ!!!!!!!!!!!!!!

第二話　試験は災難と何か

第二話　試験は災難と何か

Side

「しっかし、あれだなあ。まさかお前が、俺のこの息子をスカウトとはな・・・」

グリムの父親であるバルト＝アルヴェンが地上にある建物の中で横に居る、自分の愛弟子達に向かってつぶやいていた。目の前に映し出されているのは、自分の息子の試験の状況。

一応は教官の資格に加えて、試験監督の資格も持っている。今回は偶然当たってしまい、自分の息子の試験監督をする羽目になってしまった。

監督といっても、試験監督の監督役。つまり監督官なのだ。合否は監督役の二人に任せてある。

「グリム君は六課のFWにうつってつけですよ。安定性、実力、ともにいい線行ってると思いますよ」

その愛弟子の一人である。高町なのは、画面を見つつスラスラと答えていた。身長さがバルトとかなりあるので、自然と上を向く形

になつてしまふ。バルト自身は見た目は25歳前後に見えるが、実際は40代と以外に高齢だったりする。だが本当に「俺は20代だ!!」と言われてしまえば本当に分からない位、若く見える。よつて、周りから見たら、兄と妹、もしくは恋人同士にも見えなくは無
いとが……。

「よせやい、グリムもまだまだヒヨツ子だし、お前らも最近は見
ねえが、まだまだ完全って言えるまで行ってなさそつだしよ。違
うか？」

「言つての通りです……」

少し声のトーンが落ち、やや悲しそうな表情が伺えた。生憎、顔
下に向けてしまったので、バルトの角度からでは表情が殆ど分
なかつた。

「私、管理局に入ってから一度だけ大怪我をしてしまいました……」

「ああ、知っている。確か……魔導師に復帰できるのが奇跡だ！
とか言われるほどの大怪我だったけか？」

「そうです、腹部に一撃くらつてしまつて……」

なのはは、場所を指し示すかのように腹部をさすつた。あのときの
事を思い出しました少し声のトーンが下がる。それに対し、バルトは

なのはの視線に合わせてるようにしゃがんだ。

「いいか、高町。人間はな巧くできてねえんだ。ミスもすりゃ、過ちだって起こす。だがよ、それでいいじゃえか。何もかも成功して、失敗なんかしねえ人は絶対に成長なんかしない。人はな、失敗と挫折があつてこそ成長するんだ。だからよ、過去に囚われずに、まだ始まつていない未来を見ようや」

「………はいっ！」

少しの涙目。必死にこらえていたのがよく分かる。しかし服の袖で涙を軽く拭くと、少し目の赤い「いつもの高町なのは」だった。

「その二人も分かったか！ テスタロッサに八神！」

「「わかっていきます（よ）」」

バルトの励ましタイム（？）が終わると4人は、グリムの試験の様子に目を凝らしていた。

見ると、試験自体はすでに終盤を迎えていた。ここまで大きなミスも無く。順調に来ている。残すは最終関門だけとなった。

最終関門は、航空型オートスフィアの一掃。多くのオートスフィアが一挙に出てくるので毎回受験者をはのけている。

「あ！ そうだお前ら三人は後で集合な！」

「了解（です。）（や。）」「」

何があるのか三人にはまったく分からない。とりあえず返事だけはしておいた。呼んだ当の本人であるバルトの手には、一つの五角形のクリスタルが握られていた。

S i d e o u t

S i d e グリム

後、前、横とあらゆる方向からの魔力弾による攻撃をよけていた。俺自体はそこまで身体能力が硬くなければ、魔力値もいとこ中の上辺り。何一つとりえが無かった。唯一あるとすれば、それは視界の広さと、空間認識能力ぐらいだ。一気に出てきた航空型のオートスフィアに対処し動く。見たところ15機しか居ないように見える。その15機がまた別の陣形を組んで、こちらに向かって攻撃をしてくる。

「そんなもの！ あたる・・・わけがっ！ おっと！ ねえっ・・・だろっつと」

大きく避けずに最小限の範囲で避ける。所々、視野外からの攻撃も避けつつ隙を狙っていた。その時、15機のうちの3機が移動し始めた。陣形の変更の瞬間

「そこだあああああつ！！！」

一気にその3機の抜けた穴を使って一挙に攻める。直線的に一気に加速し、鈍く光る刀身が魔力を籠めたのでエメラルド色に輝いていた。そして、一気に振りぬいた。刀身が長いおかげで少し離れていたのも合わせて、航空型のオートスフィアが一度に4機爆発音をたてて破壊された。

そして、その爆発と魔力を纏わせた斬撃の余波で加速し一気に上昇し空の高いところまで舞い上がりスフィア達を見下ろした。幸い爆発の煙などで一瞬だが、スフィアたちは俺を見失ったらしく追っつこなかった。

(ちょうど感じに配列されているな。さすがは機械なだけある！)

何がさすがなのかは、まったく分からないがとりあえず機械なので配置はいくつかのパターンで決まっている。先ほどまでに少しずつ動作を見分けて何とか3パターンほどは見破れたのだ。そして今がその3パターンのうちの一つにあたる配置。

「さて仕上げだっ！ カートリッジロード！！」

リボルバー式のカートリッジシステムが作動し、大剣の柄の前にある刃の部分に搭載されたリボルバーが回転し2発のカートリッジをロードした。

左手を目標のスフィアに向けて魔力を集中させる。

「天から注ぐ百の星々、光の飛礫となり目標を撃て・・・アクセルシュータースペクトルシフト！ 撃ち貫け！ ファイア！！！」

20ほどの閃光がそれぞれのスフィアに向かって襲い掛かっていった。

1機、また1機とスフィアの数が減っていく。しかし、次の瞬間

驚きの光景だった。魔力弾をすべて制御しきり、スフィアのすべてに当てた。はずだった。

見ると、残りの11機のうち、5機だけが残っていたのだ。

「確かに当てたはずなのに・・・って！ じっとしてる場合じゃねー！」

煙が晴れるのと同時に、その5機が俺のところへ向かってくる。さすがは航空型と言ったところか、スピードがかなりある。下手した

らBランク試験で無いくらい・・・。
(あれ本当にBランク試験のスフィアかよ！ ぜってえ誰かいじっているだろ！)

へっくしっ!!

どこかにある、研究室の中で一人の女性が大きなくしゃみをした。
へっくしっ!

「だれかなあ？ 私を噂してるのは・・・？」

「はええよ！ くそつたれが！」

後ろからの攻撃を避けつつスフィアから逃げる。逃げると言うか完全に追いかけてこ状態だ。俺が出せる最高速度は100km/hと言ったところだ。だが、それに普通に追いついてくるスフィアはとても早いとだけ言っておこう。

ピピピピピ

『ヤッホーグリムちゃん！ レチルの登場だよ。急で悪いんだけど、あのねえ今回のオートスフィアはねシェリーさんのお手製が混

ざってるよ〜 って連絡するの忘れてたから今しとくね!」

「おせえよその連絡! 今そのスフィアたちに追っかけまわされてるの! しかもお袋特製のスフィアだって!? 勝てるかそんなもん!」

『シェリーさん曰く「あれは、グリムがちゃんとなんと勝てるようにしてあるから大丈夫よ」なんだって、がんばってね〜。バイバイ!」

そう言ってレチルトの通信が切れた。なんだかんだ突っ込みどころ満載の内容だったが、それは後で試験監督の親父にでも聞くとしよう。というかこんな監督でいいのか?

「お袋の特製だったら、手加減してたら軽く死にかけな・・・」

なぜかって? ここで少し過去のお話でもしようか。なに? 試験中? 関係ないよそんなもん。

さかのぼる事20年ほど前。まだ前線で勤務していた俺の親父、バルトIIアルヴェンが大怪我を負ったんだ。その時使っていたストレージデバイスは大破して、もはや修復不可能とまで言われたんだ。だけどそこに現れたのがシェリーIIパーシー。俺のお袋ね。本局から呼ばれたお袋は、当時親父の働いていた戦技教導隊のところへ、転職になったんだ。なぜかって?

そのとき教導隊に居た技官(男)が定年になっていなくなっただ。それで、なんだか紆余曲折があっただ。デバイスを修理して結婚と言っただ。

細かいことは、聞いてないし、聞く気も無い。でもこの二人は今もバカッブルじゃ無いのってぐらい仲がいいのだ。なので多分、今回の“コレ”も多分親父が原因だろうな。

少し思考にはまっていたがそんなことを直ぐにはき捨てて目の前の敵に集中する。

「ウインドシューター！」

リボルバーが回転しカートリッジが1発ロードされる。すると周りに5つのエメラルド色をした魔力弾が生成される。

「シュートツ！！！！」

5つの目力弾がスフィアに向かって飛翔していった。それを感知したスフィアは散開し、あちこに散らばっていく、もちろんのこと発射した魔力弾は追尾式でそれぞれを追尾していく。

「さて、終わらせようか ツインソニック・・・
ムーブ！！！！」

それは一瞬のできごとだった。両足と全体に展開した魔力で一気に加速する。

コレが、俺のオリジナル“ツインソニックムーブ”だ。他が使うソ

ニックムーブに比べてかなりスピードが違う。だけど俺自身が未熟なのでまだ普通のソニックの方が早い人も居る。俺は、ソニックで、目標に向かって一気に攻めかかる。

「だりやああああああつ!!!!!!!!!!」

2機のスフィアを切り裂き次の相手に目を向ける。後三機、周りを見渡すと、居るのは2機だけ。

「ッ!!! 何処行つた!?上かッ!?」

上を見ると一機のスフィアが魔力弾を撃墜したのか、スフィアだけがこちらに向かってくる。すると、スフィアからの攻撃が始まった。俺はそれを“ラウドシールド”で跳ね返し攻撃に移る。

「ウインドストライク!!!!!!!!!!」

大剣に魔力を籠めて、一気に振りぬく。すると、魔力刃が目の前にでき剣速よりか速い速度で魔力刃がスフィアに向けて飛んでいった。

ドカアアアアン

大音量を上げてスフィアが破壊された。

「よっしゃ！ 残り2機一気にかたずけてやるっ！」

幸い残りの2機はいまだに魔力弾と追いかけてっこ状態で、視界に入っていた。

この魔力弾を使わないわけには行かない。

（この魔力弾でかたずけてやるか！）

リボルバーが更に回転し、カートリッジの残り、3発をすべてロードする。

「ハイスピードミドルソニック！！」

刹那、2つの魔力弾が見えなくなった。と、同時に2機のスフィアを文字通り“撃ち貫き”した。

それを成し遂げた、グリムの表情は満身創痍であるがなんだかりりしく見えた。

S i d e o u t グリム

第二話〜試験は災難と何か〜（後書き）

あとがきは、まああまりないっちゃ無いですね（汗）

前回みたいにあとがきコーナーを作るのも良いんですが……何せギャグの才能が皆無なもので（泣）

誰か、ギャグの書き方教えてくれませんかねえ……

それでは、最後に

感想、意見などどんどん送ってください。基本はほめられて伸びるタイプだと思います（苦笑）

あと、誤字、脱字などの指摘もあればよろしくお願いしますね。

第三話〜驚きと意外〜（前書き）

すみません、中々内容が思いつかず内容が薄っぺらい物になってしまいました。

三回、四回ほど書き直したのですが、何回やってもバルトさんが出てきてしまい、

主人公のグリムが目立たないという事件が多発してしまい書けずじまいでした（泣）

しかも少ないです、本当にごめんなさい。

第三話　驚きと意外

第三話　驚きと意外

S i d e　グリム

今日は、あの日から数日がたった。機動六課の設立の日であり、グリムの誕生日でもある。

うそだ！？　と思われるかもしれないが、実際にそうなのである。まだ春である季節に生まれた俺は、この季節が近づくとなぜか自身の中。とって言った方がいいのかどうか分からないが、この辺と言う場所がムズムズしてくる。なぜかと言う理由は知っているがあまり口外したくは無い。

「はあ、何か嫌だなあ………ああ、帰りたい」

「いいから黙っていなさいよ！　聞いているこっちまでテンションが落ちるじゃない！！」

と、隣から少女にしては、少しっぴかりし過ぎているであろう、オ

レンジ色の髪をした少女ティアナが小声で怒鳴ってくる。しかし、
小声なので全く怖くは無かった。

そして、その横には「イヌだろお前！」と言われてもおかしくない
ぐらいのイヌ属性持ちの女の子だろうスバルが見える。

「ん〜グリム〜なに？ 私の顔に何かついてる？」

「何にも付いてねえよ・・・てかお前の顔に何か付いている時は、
何か食った後だろ」

「何でそうなるのよ！？ 私もれっきとした“女の子”なんだよ！
！ そんなこと言わないの！！」

「何処にアイス十段重ねやパスタ8人前食べる“女の子”が居るん
だよ・・・」

少し前、訓練校時代にこいつとショッピングと言う名の食べ歩きツ
アーに行かされた時は、回りの目線特にギャラリイ的な目線が痛く
て痛くて仕方なかった。

だってさ・・・いった場所。もとい店がミッドチルダでも有名な
大食いやデカ盛りで、店に連れて行かれ飯を食うことに・・・ウン、
嫌だった。ほんとに嫌だった。

「居るじゃん“ここに”！！」

「俺が言っているのはあくまで“普通の女の子”だ！！！！」

「そこ五月蠅いでゝ人の話しは聴こな！」

「すみません……………」

少し声が大きくなってしまったのか、前でスピーチ中の八神二等陸佐に怒られてしまった。畜生、完全にあっちのせいなのにこっちのせいにされるなんて、理不尽だ！ 傲慢だ！

そもそも、機動六課に何であいつらがいるんだ！？ この腐れ縁纏いすぎだろ……………

S i d e o u t グリム

S i d e -

時は数時間前にさかのぼる。まだ朝日が昇り始めて少ししか時間だたっていない時。

グリムは、軌道六課に向かう道のりを歩いていた。まだ集合まで1時間ほどあり。このスピードなら丁度間に合うであろう。荷物はすでに宿舎のほうに転送しており、手に持っている荷物は貴重品など

の少しだけだった。

「くあつ………」

大きなあくびを一つかみ締め、再度機動六課への道を急ぐ。まだ朝が早かったので少し肌寒いときだった。

スバルとティアナは「今日は、FWの残り3人が来るから顔合わせよろしくね」と高町一等空尉に言われた。もう少しで、部隊長の挨拶が始まるであろう時間帯まではまだ20分ほど残っており、ティアナが外の空気を吸ってくるという、外に行つてしまった。もちろんのことスバルもついて行き、機動六課の隊舎前で少し日の上がった空を見ながらたちずさんでいた。

「それにしても気持ちいい朝だね。んんんっ、はあ……」

「スバル、あんたFWのメンバーで何か聴いてる？」

「んんんきいてないよ。でも何で？」

さっきまで背伸びをしていたスバルがご満悦な顔をしてティアナの方を向く。その際にどこかの骨がコキリといい音が鳴る。

「なんとなくよ……少し嫌な予感みたいなのがし……」

「ふうん、ティアでもそんな事言っただね。びっくりした。」

「驚くようなことでもないでしょ……」

そういつてまだ涼しげな春の空気を、思いっきり吸って気持ちを落ち着かせるティアだった。そして、スバルもまた大きな背伸びとともに思わず息が漏れるのであった。

S i d e o u t -

S i d e i n グリム

あれから40分ほど歩いていくと、やっと機動六課の隊舎の全貌が伺えるまでになって来た。

よく見ると隊舎の前に二人の人物が見えている。身長は150〜160cmぐらいで片方がツイインテール、もう片方がボーイッシュな短めな髪だった。そして、更に近づいていくと片方がオレンジ、もう片方が青色の髪をしている……おかしい。どこかで見たことのあるシルエットであった。

「おーーーーーい!!!! グーーーーーリーーーームーーーー!!!」

この声は、間違いなく大食いのスバルではないか!? ということは、もう一人はティアナか。自分の耳を疑うかのように何回か耳を塞いだりしてみたが聞こえる声は同じで間違えのない声だった。

「ああ、ひさしぶりになるのか? お二人さん?」

「まだそんなに経ってないわよ・・・それよりかどうしたの? こは関係者以外は立ち入り禁止なんだけど」

「関係者ねえ〜一応FWのメンバーなんだけど」

「ああ、FWのねなるほどね・・・」

見るとスバルとティアナの二人が、ん? という顔を少しずつエフェクトで冷や汗が見えている様な気がする位になっているのか、と思っていた矢先。

「「エーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」

「ひるむいわっ!?!?!」

そんなにも、驚かれることだろうか？ 完全に“想定外のやつが来た”という反応をされてしまった。俺ってそんなやつに思われたのか………。

「あーびつくりした。まさかグリムがFWのメンバーだったなんてね」

「ほんツとだよ！！ 思わず大声出しちゃったよ！！」

「お前らな……」

二人と機動六課の内部の廊下をあるいてながら先ほどの事について話していた。どうでもいいが、スバルからはなぜか逆切れされかけた。こんなにも理不尽なことは無い。

後のFWメンバーは、フェイトⅡテストロツサⅡハラウン執務官が保護者のちびっ子2人らしい。ハラウン執務官が保護者なんて、なんとハイスペックなのだろうか。

そんなことを考えていると、あつと言つ間に大きなロビーに到着した。あと10分もすれば部隊長の挨拶があり軌道六課の殆どの隊員が集まっていた。

「人多いなあ。つて言うより何か見たことある人のほうが多いよ
うな気が……」

当然だが、うちの親特にお袋の方は、優秀すぎるデバイスマスターであり「デバイスの母」とまで言われるほどの超超超有名である。俺の家の離れにはお袋の“デバイスのための家”がありいつもここでデバイスの修理や開発を行っている。

中でも多いのが弟子入り志願者だ。俺が覚えているだけでも有に100は超えている。

中には弟子入りできた人もいるが、役9割5分が断られて帰される始末だ。

そして、今日の前に見えているのがその狭き門である弟子入りを成功し見事デバイスマスターのノウハウを習得したシャリオ「フェニール」さんではないか。

「シャリーさんお久々ですね。元気にしていましたか？」

「グリム君！？ 大きくなった！？ ってかなり過ですよ！！ ええーっ？？！？」

「とりあえず落ち着いてください、あわてすぎてビックリマークとクエスチョンマークが逆になっていますから」

「そんな見えないところは見ないでくれる？ やっぱグリム君なのね・・・把握しておくね・・・うん・・・でもあれは一体・・・ブツブツ・・・」

そんなに変わったのか俺・・・？ いったん小言でブツブツ言っているシャリーさんおほって置いて少し距離を置く。そして時間を

チラリと見ると。すると挨拶まであと少しであった。

「そろそろか………アあっ!!! 何かムズカユイツ!!!」

全くこの季節は嫌になるものだ……

Side out グリム

Side in -

「長い挨拶は嫌われるんで、この辺にじときます。以上八神はやてでした」

はやての短く内容が良い挨拶が終わり、解散のような空気となる。しかし、はやての目にはまた違った風景が見えていた。

(あくだいいじょうぶやるか？ さっきからグリム君は少し五月蠅いし……少ししかるかな？)

はやて自身グリムの訓練校時代から知っており、一時期お姉さんのな立ち居地にいた。なので叱るというより、注意のほづが正しいがはやての脳内では、
グリムを注意する「叱る」という方程式的なものが成り立ってしま
い。思わずこうなってしまうのだ。

「まあ……ええか」

目の前に写るのはまだ宝石になっていない、原石の状態のFW5人のきらびやかで、楽しそうな姿だった。

「スバル、俺の紹介ぐらいちゃんとしろよ!!?」

「いいじゃん、グリムなんかこんな感じでっ!」

なぜかグリムだけ扱いがひどいのは分からないが、唯一ついえることはグリムは間違いなくすでにFWの中心になっていた事は間違いの無いことだった。

Side out

第三話〜驚きと意外〜（後書き）

次回こそは、じかいこそは！！！！！！！

遅れなイッ！！！！！！

という事で、感想・訂正・要望などドシドシ待っています。

あとがきコーナー・・・・・・・・もう少しお待ちを・・・・・・・・（汗

第四話〈意外な人物と出会い〉（前書き）

お久しぶりです。ジャンヌです。

前回からだいぶ開いてしまわれたみたいですね。コレを投稿した後次は多分設定集か、SSかなと思っておりますのでどうぞよろしくお願いします。

それでは、第四話どうぞ。

第四話 意外な人物と出会い

第四話 意外な人物との出会い

Side

機動六課が発足したその日。今日は六課での初訓練の日でもあった。しかし、グリムはとて大きな危機？に直面していた。別に生命や仕事に支障をきたす訳でもないが（どちらかと言えば後者は怪しいが）それでもグリムにとっては危機に違いないのであろう。

F Wたちの目の前には、見た目20代の六課の制服を着た男性が一人。身長は180後半ほど、癖の少ない髪に明らかにインテリな顔つきで赤色の瞳がとて目立っていた。

「何故に、あんたがここに？」

「偶然と言っても言い位の確率で、その廊下を曲がったところに隠れているこの部隊長、八神はやて二等陸佐に、ほんとーに偶然スカウトが掛かってしまっただけにいまするわけなのですよ。」

「偶然って言うのかそれ・・・」

そういつてグリムより頭一つ分違う青年が指さす方向に目を向けたグリム。すると、「ばれとったか」と半分笑いながらはやてが出てきた。当然FW陣は誰一人気づいてなくエリオ、キャロは少々ビツクリしていた。

「どうもこのたびはありがとうございます八神二佐。こんな良い部隊にスカウトしていただいて光栄です。」

「そんな敬語なんかやめてくださいライルさん。あなたは私より3つも年上なんですから。それにまだ出来たばかりのしかも試験運用の部隊ですよ。」

「ああはははは」と二人の笑い声が響く廊下で当然のことながら蚊帳の外となっているFW陣となのは。まだまだ世間話が続きそうなのでここで、なのはがとうとう切り出した。

「ねえ、はやてちゃん。ちょっと良いかな？」

「ん、何やなのはちゃん？もしかしてライルさんに一目惚れでもしたんか？」

「いいいったいなに言っているのははやてちゃん！！！！！！？？？」

その言葉に思わず慌て出したのはなのはだけと思われた。が、しかしその発言に吹き出してしまった人物がいた。

Side out -

Side in グリム

「ん、何やなのはちゃん？　もしかしてライルさんに一目惚れでもしたんか？」

「ぶツ！」

「何であんたが吹き出してんのよ・・・」

全くそのとおりだ。別に俺が吹き出す必要なんて何処にもなかった。この場面はどう見ても完全に、八神二佐がなのはさんをもてあそんでいるように見えるはずだ。そう、あの男でなければ。この吹き出しが八神二佐にばれたらどれだけ弄られるだろうか、とっさに口を塞いだから良いもの、か・く・じ・つ・に俺も狙っているのは間違い無い。

「あれえ〜何でグリム君までふきだしているのやるなあ？」

どうやらばれていたらしい。

「まあそろそろ種明かしやな。それじゃあライル＝アルヴェン一等陸尉教導官補佐殿、自己紹介をお願いします」

「了解、八神二等陸佐。えっと紹介にあった。ライル＝アルヴェン一等陸尉です。ここでは、その高町教導官の補佐として働くのでよろしく。ポジションはフルバック。主に狙撃主体の射撃型なので聞きたいことがあったら言って下さい。ついでにそのFW陣の一人グリムとは、名前の通り義兄弟という関係なので」

ほんとに何しにきたんだ馬鹿義兄貴。絶対狙ってスカウトしただろ。そんなことを思った瞬間。

「……………え……………っ?!?!?!」「……………」

ちびっ子二人。エリオとキャロ（覚えるのに少し掛かった）とテイアナにスバルなぜかなのはさんまで驚いている。何でさ。FWのみんなは分かるよ。教導官の補佐だったら資料は行くはずだろ。

「あ！ そうそうなのはちゃん。これ渡しに来たんやったわ。ライルさんの資料」

「えっ!?!? 今頃!?!?!」

やってくれたなオイ！ 通りでなのはさんも知らないわけだよ。普

通は事前に渡すだろうが！ 何処に発足して一日目で資料不備が見
つかる隊があるんだよ！？」

後ろで、ティアナとスバルがぎゃあぎゃあ五月蠅いがどうってこと
無いくらいに今はこっちのほうが必要だったりする。

「八神部隊長！？ 何でだまつてそれじゃあ早速訓練と行きまし
ようか皆さん。今日は訓練初日ですから少々軽めに行きますが無理
はしないようお願いしますね」って！ 聞けよ馬鹿義兄貴！」

やっぱり俺はこいつが苦手だ。俺のペースは乱されるし、口上手だ
し戦闘強いし。俺の勝てる要素が無い。あ、でも料理（お菓子作り）
なら負けないか……。

ふと見ると、なのはさんがFWのみんなを連れて行っている姿が
見えた。なぜだかスバルは義兄貴のそばについて質問の嵐を浴びせ
ているようにも見える。

しかし、久々に義兄貴の姿を見た気がした。確かに年も5つほど離
れていてすでに一等陸尉の称号まで持っているので、始めてみた人
は「本当に兄弟！？」と疑うのが確かである。

「あのう……グリムさんいきますよ？」

「おお、悪いな……少し考え事してた」

エリオに声を掛けられこの場後にする。右の窓からは綺麗な青空と、
少々の雲が流れており訓練をするにはこの上なく前項の日和であっ
た。少し前を歩くエリオは早くティアナ達に追いつこうと少々早歩

きで向かっていく。それを見て早歩きになっている俺も居たりしたのだった。

まだ、この部隊での生活は始まったばかりだ。

【あせらずゆっくりと『歩み』を進めていけばいいさ】。と、過去に誰か知らない人に教えられた言葉を思い出していた。

S i d e o u t グリム

S i d e i n -

所は変わって訓練スペース前。

この機動六課は海上を埋め立てて立てられた部隊なので訓練スペースである場所は四方を海に囲まれていた。しかし訓練スペースと言うためにはあらかじめ何かしらの物があるのである。しかし、グリム達の目の前に広がっている訓練スペースは、何も無いまさに殺風景という言葉がピッタリな敷地だけが広がっていた。

「あのお、ここで訓練をするんでしょうか？」

「さすがにコレは・・・」と思ったのかティアナが早速質問に出た。

それもそのはずである。ティアナたちは以前陸士部隊に勤めておりその時にでも良かれ悪かれ「訓練スペース」はしっかりしている所だった。

「そうそう、早まらないでください。ここにもちゃんとして『仕掛け』があるんですから。それでは、シャーリーさんお願いできますか？」

「はいはい、お任せください」

「ということでは、説明のほうを高町教導官殿お願いしますね」

シャーリが、空中に浮かんだディスプレイを操作し、あつという間に目の前に大きな町のホログラフィックが出てきた。よく見ると高層ビル群らしく大小少なくとも15は見えている。グリムたちがそれぞれ驚きに浸っているとき、高町隊長からの説明が入った。

「この空間シミュレーターは、私が監修した訓練スペースで実際はホログラフィックなんだけど、注目すべき点は『触れる』ってところかな。用途に応じて場所に変えられる利便性の高い訓練場なんだよ」

「説明ありがとうございます。それでは早速皆さんには、お預かりしていたデバイスをご返却いたしましょうか」

そういうと、4つのアタッシュケースの中からそれぞれのデバイスが取り出された。見たところ変化などは見受けられなかった。それ

それぞれ手に持ち感触を確かめておりグリムとエリオは軽く素振りをしてアイナは銃身を見ていた。

「今返したデバイスには記録用のチップが埋め込まれていて、今後の訓練の仕方を変えるときなどに重要になるデータを取ったりするのにも使ったりするからちょっとだけ大事に扱ってね」

「そして、もうひとつ」

ライルの手からFW全員に渡されたのは、手のひらサイズの正六角形の物。一見デバイスのようにも見えるが少々違う感じに見える。色は付いてなくどれも無色の透明でした。地面の色がぼやけて見えていた。

「それは、今は何にも関係ない代物だけど後から結構重要になってくるものですから、皆さん失くさないように常に肌身離さず持ち歩いてくださいね。」

「それじゃあ、早速だけど今日の訓練張り切っていこう!!」

なのはの掛け声が続いてFWたちの声が上がリ、青い青い空に高々と響き渡っていた。

S i d e o u t

第四話〈意外な人物と出会い〉（後書き）

まあ私の文才ではこの程度が限界ですねw

ちなみに、恋愛などは少なめでいくつもりです。（ここ重要）

それでは、感想や誤字、アドバイスなどその他モロモロあればよろしく願います。

番外編 第一話〜バルトの昔話1〜（前書き）

この番外編の主役は絶対にバルトさんになりますのでご注意ください。

それでは、どうぞー！

番外編 第一話〜バルトの昔話1〜

番外編 第一話〜バルトの昔話1〜

今のなのは、フェイトそしてはやてがこんなにも成長しているのはなぜか。
答えは簡単だ。三人が天才であったからである。それ以上それ以下でもない。

実際のところ天才と凡人では行き着く場所が違ってくるのが現状である。

天才は何をやってもすぐに吸収・応用が利く。

しかし凡人はどうだろうか？

凡人でも吸収・応用は利くだろうが到底天才には及ばないであろう。
天才と凡人。同じ環境、同じ設備、同じ年齢で訓練あるいは授業をしても9割以上の人が天才のほうが『上』と判断し凡人を『下』とみるだろう。

なら、凡人は絶対に天才には勝つことができないのか？

その答えは『否』である。

それを立証する証拠というものはないが『世の中何があるかわからない』という言葉があるように凡人が天才に勝つことはある。

要因はいくつかあげられる。その一つに「慢心」という例が挙げられる。

天才と凡人まず大きく違ってくるのが戦いに赴くための姿勢である。天才は自分には相手をねじ伏せるだけの力があると『誤認』していることが多々ある。

それに比べて凡人の方は例えば、『どうやって相手の勝つか』等といった『下準備』をしてくる。

勝負が決まる原因としては、これが一番多いといえるであろう。

この俺、バルト・アルヴェンは天才でもなければ秀才でもない。ただ魔力が少し高いだけ。何の応用力も、意外性も、爆発力もない。ただの魔導師だ。

だが、『何も取り柄がない』といっても何もしなかったことはない。色々なこと、剣術、体術、砲撃、射撃、召喚 e t c … 数多く試したが、何もかも中途半端。

どれも達人や、名人といった領域に達するものにはならなかった。

だが、逆に俺には苦手がなかった。

射撃が得意な魔導師の多くは、近接戦闘が総じて苦手だ。逆もまたしかり。

だから俺はやった。とことんやった。戦術、戦闘技術。総じて実力を上げていった。

だが、同時に俺にはとんでもない副産物が付いてきてしまった。

このお話は、グリムがまだ訓練校に入るずっと前のお話である。

まだ、少々夏の暑さが何処かに残っていたのか、もう九月の中旬になると言うのに夏の暑さがぶり返した様に暑かった。

しかし、空気は乾燥していて夏の時みたいに湿気はなく少しは過ごしやすい天気だったがその分、直射日光で肌が痛む感じがした。

そんな中、バルトは自分の教導隊のある区域に来ていた。ここは自然が多く、とても大きな噴水のある公園がある。この公園は、ちょっとしたテーマパークを凌ぐぐらいあり、スポーツの競技場としても使われていた。

今日も元気な少年少女たちが遊んでいた。

「はあく暑い。まったくいきたいなんだ。今日は訓練指導だけだと思ってたの・・・」

「おはようございます。バルト教官」

「おーおはようさん。今日も訓練かい？」

「はい、今日は模擬選の日で『今月のまとめテスト』ってところですよ」

「ははっ、相変わらずハードだねえ。俺じゃあ逃げ出すかもな」

そう答えると「それじゃあ、失礼します。またあとで」と手を振っ

て先に隊舎の方へ走っていった。
俺はそれに軽く答えまた隊舎へと歩みを進める。

そうか、今日はテストの日か・・・
あのバカは。やりすぎないものだろうか。

と、その前に喫茶店によってコーヒーでも飲んでいくか
不安だけが異常なほど積もってしまった。

隊舎にて

ここの教導隊の隊舎は、教導隊の中でも大きい部類に入る。まず何
ととっても訓練場の広さが違う。訓練場だけで5コートあり、その
うちの4つは屋外にある。総面積で言えば教導隊第2位の大きさを
誇る。実際に俺もどのくらいの広さかは知らないが、第2位という
ことだけは知っている。

それはなぜか

「相変わらず、派手なポスターだよ。誰の考えだかしらねえがここ
までする必要は無いんじゃないの？」

入り口を入れてすぐの所に大々的にここの隊をアピールしたポスタ
ーが貼られており、そこには『来たれ、戦いのスペシャリストとな

りたいものよ。訓練スペース面積第2位、教導員戦闘大会団体の部第1位』と書かれていた。

この教導員戦闘大会というものは、各教導隊から代表を選び文字通り戦闘でどこの教導隊が最も優秀か競うものだ。

ちなみに個人戦では、2位と5位と8位と大健闘だったりする。

俺の順位は個人では8位で、団体で優勝という感じである。

ちなみに、この教導隊の中で二番目に年を取っており（まだまだ若い）がこの教導隊教導員隊長を務めさせてもらっている。

しばらく歩くと唯一屋内にある訓練スペースが見えてきた。そこには先ほど会った訓練生とその他にも何人かいた。模擬戦も終盤なのか、訓練生のバリアジャケットにはあちらこちら汚れていた。

そろそろ自分の仕事（未だに何かわからない）を始めねば思い、立ち上がった瞬間……

急に目の前が一色で塗り潰された。

桜色に……

「……やりすぎだ。アホ」

今日も平和で穏やかな日は、遠い存在になりそうだ。

とりあえずは、あの訓練生たちを助けにでも行くか……

訓練スペースにて

訓練スペースのとある場所で、白を基調としたバリアジャケットに栗色髪をツインテールに束ねた少女がアタフタしていた。

「あわわわわ・・・どどど、どうしよう。ちょっとやりすぎた!？」

<そのようです。マスター後方に注意してください>

「ふえ？ いったいな」

ゴチン!!

「っつ!!!!」

「おー固え固え。相変わらずバリアジャケットの強度は馬鹿みたいにあるな」

「バルトさんいきなり何するんですか!？ もう頭が割れるかと思いましたよ」

「俺はこの訓練場が吹っ飛ぶかと思ったね。いい加減加減って言うもん分かってくんねえかなあ？ お前さんが訓練するたびに別の訓練している他の生徒を救出する身にもなってほしいものだねえ…高町なのはちゃんよう」

平静を装っているが、思っていたより、なのはが堅く右手を軽く振っている。

まったく10歳だというのに未恐ろしい奴だ。まさしく天才という奴か。

俺と違って将来がかなり有望で何よりだな。

そんなことを考えていると、後ろからちようどタイミングを計ったようにこの部隊長であるリヴァル＝アイマン1等空佐が現れた。若いはずなのに少し白髪交じりの黒髪で、10年前に大怪我により戦線から離脱。

今は、ミッドでも有名な指揮官としてその名を轟かしている。完全なる化け物だ。

「まあまあ、そこまでにしておけバルト。彼女も悪気があってこのような大惨事を起こすような子じゃないさ。だからもうその辺にしてやれ」

「はあ・・・わかりましたよ。それでどうしたんですかこんな所に部隊長は今日も仕事があるはずですが？」

「いやいや、仕事自体は昼には終わる予定でいるのだよ。ここには君に用があつてきたわけだよ」

横にいる背の小さいなのは頭をなでながら、いかにも優しい口調で俺に向かって告げてくる。

「用ですか・・・いったいなんでしょうか？ この後1時間後には、リンディの儀娘のフェイト＝T＝ハラオウンの訓練に付き合う予定なのですが」

「ほほう、あのリンディ提督かね。いやぁ大物と知り合いだねえ」

「単なる腐れ縁です。というか部隊長知っているでしょ!!」

リンディとは、学生時代の知り合いであの時は凡人の俺と天才のあいつで差があつたにも関わらず、なぜか妙に馬が合い、今は亡きクライドと俺そしてリンディの3人トリオで訓練校を1位から3位まで独占したもんだ。

年齢的には俺が1番上だったが、なんせ天才が二人。ついていくのに四苦八苦していた。

「おっと、話がずれてしまったね」

(貴方のせいでしょうが・・・)

「今日の呼び出しは、まあ・・・単にもう一人訓練生を増やすことを伝えるための呼び出しだよ」

「それなら通信でよかったのではないのでしょうか？」

「いやさ、本人との立会いの下した方がいいかなと思ってね」

ここで、バルトはある言葉を聞き逃さなかった。隣のなのはは何の話か分からず顔が「え? いったい何?」という顔をしている。

(本人との立会い? ……まさかつ!)

「バルト、君は気づいたみたいだね。そう新しい君の生徒は……
・高町なのは。彼女だよ」

「え? わたしですか」

ああ、気づいたさ。気づいていたさ。こんな時に部隊長からの呼び出しなんておかしいって。だが、あえてこう言わせてもらおう……

「なんじゃそりゃー!?!?!?!?!」

こうして、バルトによる高町なのはとフェイトの短くて内容の濃い授業の始まりの賽が投げられた。

番外編 第一話「バルトの昔話1」(後書き)

いかがだったでしょうか完全なるバルトさん話はW?

こちらのほうも書いててちょっと楽しいなと思ってしまっほごでした。

それでは、誤字脱字、訂正などお待ちしております。

あと、感想のほうもいただけたら大変うれしゅうございます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8290t/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～永久の風～

2011年11月20日20時24分発行